

ルネサンス発祥の地フィレンツェ。そのフィレンツェを支配したメディチ家といえば、ルネサンス美術（建築、彫刻、絵画）のパトロンとしてあまりに有名である。しかしコレクターとしての側面はそれほど知られていないうえに、美術品ではなく工芸品のコレクターとなると、さらに知られていないのが実情である。

世界遺産都市フィレンツェを訪れる観光客も有名絵画の前では人だかりだが、工芸品のある部屋は素通りするか、そもそも工芸品の展示してある博物館にさえ足を運ばない。有名芸術家の美術品と無名職人の工芸品は明暗を分けた。工芸品がわが国に紹介されてこなかったのだから、いたしかたないことである。

ところがルネサンスからバロックの時代にかけて、美術品と工芸品の評価は現在とはまったく逆だった。たとえば一五世紀末のメディチ家が所有していたボッティチェッリの大作《ヴィーナスの誕生》は一五フィオリノほどの評価額しかないのに対して、直径二二センチのカメオ

《ファルネーゼの皿》（図24参照）はおよそ七〇〇倍の一万フィオリノという驚異的な評価額がつけられていた。稀少な天然素材に熟練の職人が超絶技巧を駆使する工芸品こそが宝物だったのだ。メディチ家の人びとが秘かに愛玩し、あるいは他国の君主、貴族、外交官、知識人、芸術家、有力市民などを自宅に招き、こっそりと、かつ得意満面に見せびらかしていたのは、美術品ではなく工芸品すなわち宝物のほうである。

メディチ家は工芸品のコレクターとしてネットワークを広げ、ときには贈答品のやりとりをともなう王族との婚姻政策をとおして国際的な地位を上昇させていった。工芸品は驚異品だった。近年、ヨーロッパ王侯貴族の諸宮廷に開花した「グンダーカンマー驚異の部屋」の研究が盛んになってきたが、そうした「驚異の部屋」の源流のひとつが、メディチ家の宝物室にはかならない。

本書では華麗なる一族メディチ家が所有した珠玉のコレクションを厳選して紹介していくことにしたい。「驚異の部屋」の黒檀製キャビネットの扉をそつと開けてみよう。そこには歴史の深い闇の底に忘れられてきた名宝の数々が、妖しい輝きを放ちながら眠っているはずである。



目次

はじめに 002

序章 メデイチ家の人びと 012

メデイチ家兄脈の人びと 012 財産目録 016 前期三代トスカーナ大公 018
後期四代トスカーナ大公 020 メデイチ家以後 022

第I部 ルネサンスの黄金時代 1434-1537

1 コジモ・イル・ヴェツキオの古代趣味と意外な豪華趣味 028

古代への情熱 028 ラルガ通りのメデイチ邸 030 サン・ロレンツォ聖堂の墓標 032

2 ピエロ・イル・ゴットローゾの聖遺物容器 033

大聖堂献堂式の聖遺物 033 《リブレット聖遺物容器》 034 《荊の聖遺物容器》 036

3 ピエロ・イル・ゴットローゾの貴石製容器 038

赤碧玉製容器 038 一四六五年の財産目録 040

4 ロレンツォ・イル・マニフィコの高石製容器 041

ササン朝とフアーティマ朝とティムール朝の三点 041 碧玉製品と紫水晶製品 043 古代ローマの容器 044
中世の容器 045 謎だらけ 046 一四九二年の財産目録 049

5 コジモ・イル・ヴェツキオとピエロ・イル・ゴットローゾの彫玉 050

メデイチ邸中庭の円形浮彫 050 《アテナとポセイドン》と《アの箱船》 052

6 ロレンツォ・イル・マニフィコの彫玉 054

ブルトレマイオス朝の《ファルネーゼの皿》 054 《アポロンとマルシユアスとオリュンポス》と《パエトンの凱旋車》 058
一四九二年における「スクリットイオ」の重要性 061

7 一五世紀の珍品奇物と外来物 062

私邸に入り込んだ機械時計 062 ビザンティン・モザイク 063 芳香を放つイスラームの香炉 064
中国磁器で食す 065 一角獣の角 068 神をたたえる異形の動物 070



第II部

超絶するマニエリスム 1537-1609

8 メディチ家の追放と帰還 072

ロレンツォ没後の混乱 072 享楽のルネサンス教皇レオ一〇世 075

9 教皇クレメンス七世、アレックスサンドロ公、カトリクス・ド・メディシス 077

ローマ劫略 077 アレックスサンドロ公のメダル、コイン、カメオ 077 サン・ロレンツォ聖堂の聖遺物容器
アレックスサンドロ暗殺 082 海を渡った《宝石箱》 083 079

10 コジモ一世のメダルと彫玉 086

ロレンツォ一世 VS. コジモ一世 086 「鉄の意志」をもつ君主 089 公妃エレオノーラの貢献 090
《コジモ一世とエレオノーラ・デイ・トレドと子どもたち》 092 《コジモ一世とエレオノーラ・デイ・トレドの肖像》 093

11 コジモ一世とパラッツォ・ヴェツキオ 095

「ダアルダローバ」 095 アステカ工芸品 097 「スクリットイオ・デイ・カリオペ」 098 「地図の間」 101

12 トスカーナ大公冠 105

ローマにおける戴冠式 105 大公冠をかぶるコジモ一世の肖像 106 第二の大公冠 108
第三の大公冠 110

13 フランチェスコ一世の特異な気質と彫玉 111

逸脱の貴公子と人妻の熱愛 111 綺想の君主の構想 112 カメオとインプレーザ 114
《フェリペ二世の凱旋入城》と《ガニメデスと鷲》 115 《黒檀と象牙の回転式球体》 117

14 フランチェスコ一世の貴石製容器 119

国際的職人集団 119 ラピスラズリ製品二点 120
三人の天才の合作《ラピスラズリ製容器（フィアスカ）》 120

15 フランチェスコ一世の「メデイチ磁器」 122

幻の「メデイチ磁器」 122 青花壺二点 123 青花皿二点 125 君主へのオマージュ作品 126

16 フェルディナンド一世の貴石製容器と貴石製胸像 127

一五八九年の「トリブーナ」の財産目録 127 碧玉製の《ヒュドラ形容器》と《ドラゴン形容器》 128
シュルレアリスティックな水晶製容器 129 貴石の胸像 131



第Ⅲ部 バロック繚乱 1609-1743

17 大公妃クリスティーヌ・ド・ロレーヌの貴石製容器

フェルディナンド一世とクリスティーヌの結婚 133 カトリヌの遺品 134 クリスティーヌの持参品 136

18 フランチェスコ一世とフェルディナンド一世の鸚鵡貝製品

フランチェスコ一世の《双鸚鵡貝製把手付き水差し（メッシローバ）》 139
中国の鸚鵡貝製品 141 鸚鵡貝製品のvariety種 142

19 貴石象嵌細工「フイレンツェ・モザイク」

「驚異の部屋」の超絶技巧 143 ローマ風の幾何学文様 144 「抽象」から「具象」へ 147
紋章と肖像 148 サン・ロレンツォ聖堂プリンチピ礼拝堂 149 大公直轄工房の具象画傑作群 150
下絵画家ヤコポ・リゴッツィ 152 風景石に描かれた絵 156

20 一六世紀の珍品奇物と外来物

新世界より 157 動植物画家ヤコポ・リゴッツィ 160 アフリカの象牙 163
財産目録の「ムーア風」と「トルコ風」 164 彫刻家ジャンボローニャの職人技 164
オスマン帝国の武器 165 日本の武器 167 ペルシア製品と中国製品 169
犀角、鹿角、珊瑚 170 機械時計と日時計 173 ガラス工芸品 175

21 コジモ二世の肖像

芸術を愛する趣味人のメダル 178 祝典用の武具 179 大公直轄工房の輝かしい伝統 180
《神に感謝を捧げるコジモ二世》 183 ガリレオ・ガリレイの指 184 宗教作品 185

22 フェルディナンド二世のプライヴェート・コレクション

《アレマニーアのキャビネット》と《フェルディナンド二世のキャビネット》 187
《フェルディナンド二世の結婚のための八角形テーブル》 190 ピッティ宮殿の豪華なコレクション 192
魅力的な膨玉三点 193 ヴィットリア・デッラ・ローヴェレのコレクション 194

23 フェルディナンド二世時代の象牙彫刻

マリア・マッダレーナとフェルディナンド二世の象牙コレクション 196 マッテアスの三十年戦争の戦利品 197

24 フェルディナンド二世の弟レオポルド枢機卿

大コレクターの傑作カメオ二点 200 象牙彫刻のいろいろ 202



25 コジモ三世と大公子フェルディナンド時代の黄金の黄昏 205

- ルイ二四世の従妹マルグリット・ルイーゼ・ドルレアン 205
- 木工ヴィットリオ・クロステンと画家バルトロメオ・ビンビ 211
- 象嵌職人レオナルド・ヴァン・デル・ヴィンネ 208
- 風流な貴公子フェルディナンド 211
- 奇抜な貴石製の高坏（コッパ）三点 216
- 大公直轄工房の貴石象嵌細工 217
- 《植物装飾と動物装飾のあるテーブル》 220
- 柔らかな蠟細工のような貴石彫刻 223
- 愛娘アンナ・マリア・ルイーザへの贈り物 225
- 破壊を免れた宗教的な銀製品 226

26 コジモ三世の聖遺物容器 229

- 禁欲的な妄信に凝り固まる 229
- ベンツィの聖遺物容器 229
- フォッジーニの聖遺物容器 231

27 メデイチ家最後の大公ジャン・ガストーネ 233

- 落日 233
- 彫玉の蒐集 234

28 メデイチ家最後の相続人アンナ・マリア・ルイーザの宝飾品 236

- 長い残照 236
- バロック真珠の動物シリーズ 239
- バロック真珠の人物シリーズ 241
- バロック真珠のペンダント 244
- 象牙彫刻の庶民像 249
- 豪華な日用品 251

29 アンナ・マリア・ルイーザの宝飾品後日譚 253

- 《兵士像のあるブローチ》 253
- 「家族協定」以後の攻防 254
- アンナ・マリア・ルイーザ没後の攻防 255

30 一七世紀と一八世紀の珍品奇物と外来物 257

- ペルシア工芸品 257
- 《メドゥーサ》と《貝殻擬人像》 258
- 珍しい武器 261
- 象牙、犀角、翡翠 264
- 中国の《つづれ織り》 265
- メキシコの《「ブッケーロ」製容器》 267
- 中国の磁器 268
- 日本の磁器 270
- 日本の漆器 272

終章 消えたダイヤモンド 275

- 「フィオレンティーノ」 275
- それからの「フィオレンティーノ」 278

【付録1】宝物にであえるフィレンツェの博物館・美術館めぐり 280

【付録2】宝石のいろいろ 300

参考文献 302

図版出典一覧 308

あとがき 311

メデイチ家の人びと

メデイチ家兄脈の人びと

メデイチ家がフィレンツェの公文書に初出するのは一三世紀初頭のころ。それまではフィレンツェ北東約三〇キロの田園地帯ムジェツロ地方に暮らしていたものと想像される。ムジェツロ出身という記録はないが、一三世紀後半からムジェツロに不動産を大量に購入した記録がある。一旗あげるために都市に出て、成功すると不動産を買い故郷に錦を飾る、そして都市の事業と地方の農業経営を並立させるというのがフィレンツェ上層市民の一般的慣行であつたことから、メデイチ家がムジェツロ出身だと推測しうるのである。

フィレンツェに出てから急速に力をつけるが、繁栄の基礎を築いたのは、一三九七年一〇月一日にメデイチ銀行を創業したジョヴァンニ・デイ・ビツチである。彼はフィレンツェ第三位の金持ちに成りあがつたが、その長男コジモ・イル・ヴェツキオ^{〔図1〕}はフィレンツェで第一位、ヨーロッパでも屈指の大富豪になり、一四三四年に市政を掌握した。その長男ピエロ・イル・ゴットゾ、その長男ロレンツォ・イル・マニフィコと三代にわたりフィレンツェ・ルネサンスの「黄金時代」の栄耀栄華を

築きあげる。

この時期の宝物室は、コジモ・イル・ヴェツキオが建てたメデイチ邸二階のマギ礼拝堂に隣接する、約四メートル×約五メートルの、窓のない小部屋「スクリットイオ（書斎）」である。「スクリットイオ」は文字どおりに豪華な彩色写本も収納していたが、むしろおびただしい数の宝物の収納展示に力点がおかれていたので、一六世紀以降のヨーロッパ諸宮廷における「驚異の部屋」のプロトタイプのひとつになるものである。どんなにすごいコレクションだったかは、建築家フィラレーテ（二四〇〇～六九年）が、じつくり鑑賞するには一カ月かけても足りないほどだ、と賛嘆していることからわかるが、残念ながら現在は跡形もない。部屋を飾っていたルカ・デッラ・ロッビアの円形テラコッタ製《月暦》一二点なども、ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館に移されている。

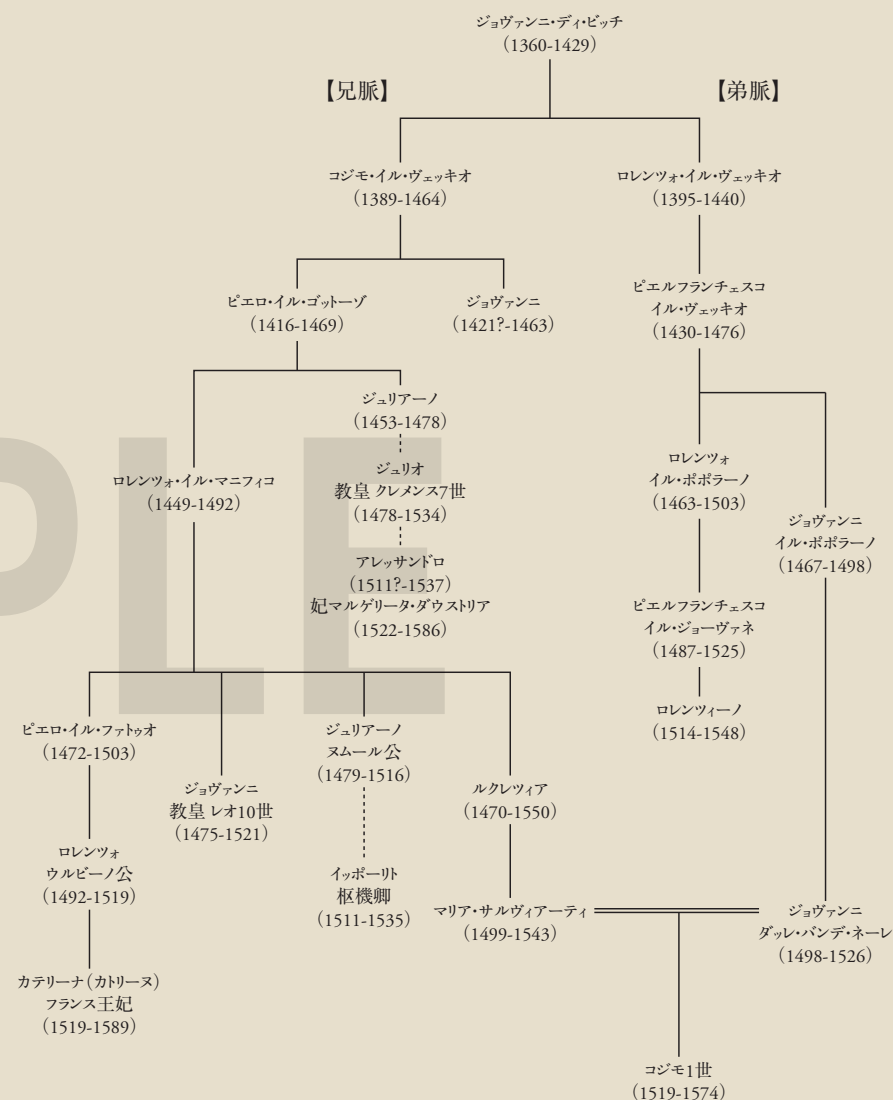
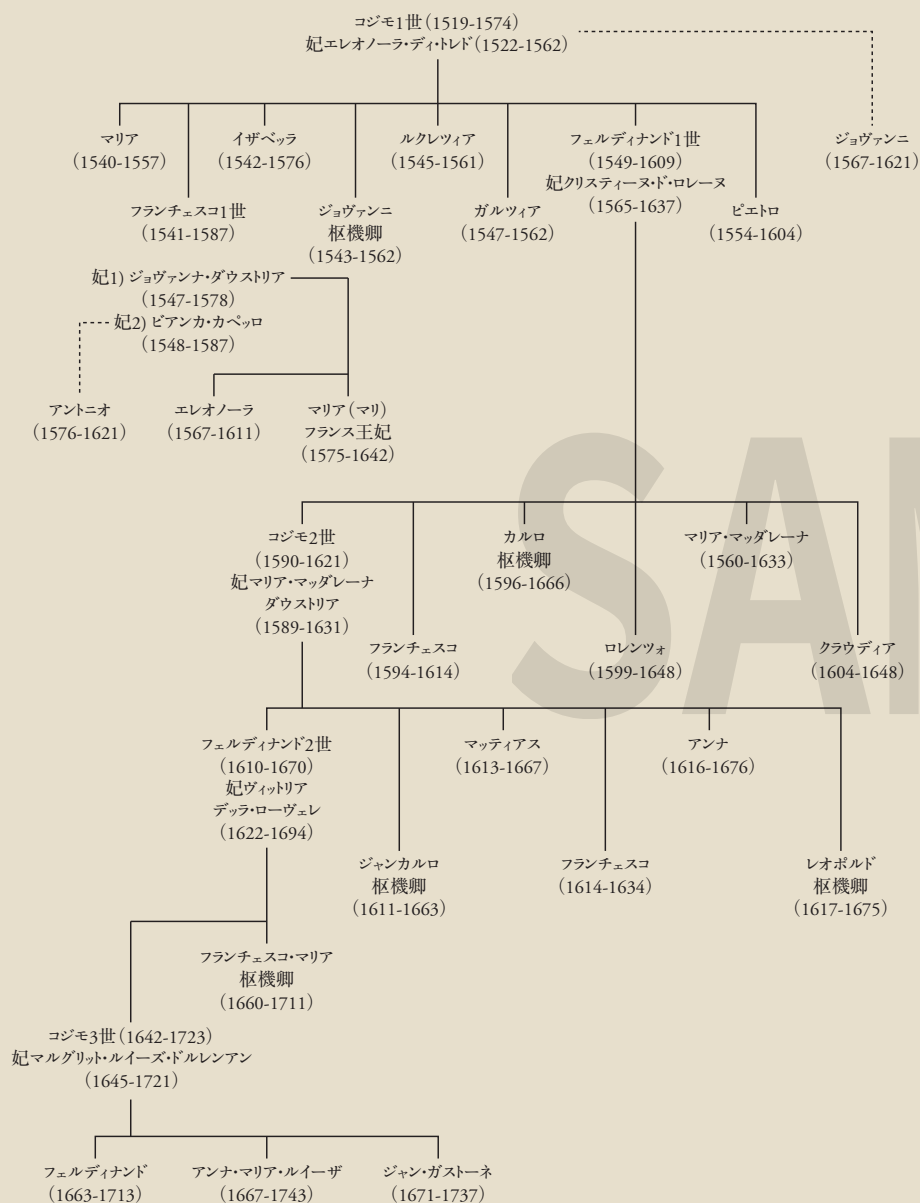
ロレンツォの長男ピエロ・イル・ファトゥオは一四九四年、フランス王の侵攻を機にフィレンツェから追放される。メデイチ家は一五一二年に復帰、一五二七年に再追放、一五三二年に再復帰。この激動の時代にメデイチ家から二人の教皇が輩出する。ルターと対立した教皇レオ一〇（在位…一五二三～二二年）^{〔図2〕}、イングランド王ヘンリ八世と対立した教皇クレメンス七世（在位…一五二三～三四年）である。



〔図2〕ピエル・マリア・セルバルディ・ダ・ベッシャ（レオ一〇世の肖像）。斑岩。一五二六～二二年頃。直径四・五cm。フィレンツェ、銀器博物館。



〔図1〕右：筆者撮影。カメオのショーケース。フィレンツェ、銀器博物館。
左：フィレンツェの工房（コジモ・イル・ヴェツキオの肖像）。貝殻製カメオ。銀縁付き。一五世紀後半。縦三・二cm。フィレンツェ、銀器博物館。



教皇クレメンス七世は庶子のアレッサンドロをハプスブルク家の神聖ローマ皇帝カール五世（在位…一五一九～五六年）の庶出の娘と結婚させる一方、ピエロ・イル・ファトゥオの孫娘カテリーナをヴァロワ家のフランス王フランソワ一世（在位…一五二五～四七年）の息子と結婚させる。銀行家という「商人階級」の出身者が教皇の国際的地位を利用して皇族や王族と姻戚関係を結んだのだから、メデイチ家の国際的な地位はいよいよ高まった。

一五三一年、アレッサンドロ^{〔図3〕}は皇帝カール五世の肝煎りで初代フィレンツェ公になったが、一五三七年に同じメデイチ家の一員によって暗殺され、残る直系子孫はフランスに嫁いだカテリーナ（カトリヌ・ド・メディス）^{〔図4〕}だけとなる。以上が本書第1部の範囲である。

財産目録

コレクション研究の一次史料はフィレンツェ国立文書館に保存されている複数の財産目録である。一五世紀のメデイチ家兄脈の主要な財産目録は、一四一七年、一四五六年、一四六五年（評価額記載あり）、一四九二年（評価額記載あり）の四点。いちばん重要なのは四番目のもので、これは一四九二年にロレンツォが死去した直後に作成されたが、一四九二年のオリジナルは紛失し、一五一二年の写しだけが現存する。

この写しは、ピエロ・イル・ファトゥオの長男ウルビーノ公ロレンツォが司祭シモーネ・ディ・スタジオ・ダツレ・ボッツォに一五一二年一月二三日に作成させたものである。一五一二年はメデイチ家復帰の年であり、すでに四散していた財産を記録にとどめておく必要が痛感されたのだ。これには重量と評価額が記されている。

重量単位の一リッブラは三三九・五四グラム。一リッブラ＝二オンチャで、一オンチャは二八・二九グラム。貨幣単位の一フィオリノは三・五三六グラムの純金のフィオリノ金貨一枚分である。一フィオリノ＝二〇ソルド。一ソルド＝一二デナロ。したがって評価額が「1110」と書いてある場合には、「一フィオリノ一〇ソルド」の意味になる。金が現代よりも稀少な時代なので、円との換算は単純には計算できないが、目安としてあげておくと、一フィオリノで買える品物は、女性用の優雅なミンクのロング・ドレス一着、または男性用の腰にさげる剣一振りである。ちなみに、フィオリノ金貨は、鋳型に金属を流し込む鋳造貨ではなく、打ち型のあいだにはさんで槌で打ち出す打刻貨なので、鋳造という言葉を使うのは正しくない。

財産目録は別邸や別荘、また邸宅のいくつかの部屋の記述が欠けているうえに、略記や誤記も少なからずある。政治的変遷のなかで四散したり湮滅したりした宝物は数知れない。致命的だったのは一四九四年と



〔図3〕ドメニコ・ディ・ポーロ作カメオ《アレッサンドロ・デ・メデイチの肖像》。玉髄、金縁付き。一五三二～三七年頃。縦三・四cm。フィレンツェ、銀器博物館。



〔図4〕フランスの工房作カメオ《カテリーナ・デ・メデイチの肖像》。玉髄。ルビーをちりばめた縁飾り付き。一五四〇年頃。縦三・〇cm。フィレンツェ、銀器博物館。

一五二七年のメデイチ家追放、一八世紀半ばのメデイチ家断絶、そして一九世紀初頭のナポレオン軍の略奪である。

現存する宝物も数世紀にわたって手が加えられたり保管場所を転々としてきた結果、目の前の現存作例と財産目録の無味乾燥な文字の羅列とを照合するのは、まことに困難をきわめる作業といわざるをえない。

前期 三代トスカーナ大公

一五三七年に初代フィレンツェ公アレツサンドロの跡を継いだのは、コジモ・イル・ヴェツキオの弟ロレンツォ・イル・ヴェツキオから数えて五代目の子孫コジモ一世^{〔図5〕}である。彼は一五三七年に第二代フィレンツェ公、一五六九年に初代トスカーナ大公となる。その長男フランチェスコ一世が第二代トスカーナ大公、その弟フェルディナンド一世が第三代トスカーナ大公である。

コジモ一世妃エレオノーラ・デイ・トレドもフェルディナンド一世妃クリスティーヌ・ド・ロレーヌ^{〔図6〕}もメデイチ・コレクションの増大に多大な貢献をすることになる。以上が本書第Ⅱ部の範囲である。

メデイチ家の娘が国外に嫁ぐ際には花婿側に贈り物をしたので、メデイチ家の宝物が国外に広まるきっかけとなった。一六〇〇年、フランチェスコ一世の娘マリア（マリ・ド・メデイシス）がフランス王アンリ四

世（カトリヌ・ド・メデイシスの娘マルグリット愛称マルゴとは一五九九年に正

式離婚）と結婚した際にも花婿に贈り物をしているが、宝物以上の後世への最大の贈り物はなんといってもオペラである。結婚祝典の一環として一六〇〇年一〇月六日、ピッティ宮殿でヤコポ・ペーリ作曲のオペラ『エウリディーチェ』が上演された。ギリシア神話では竖琴の名手オルフェウスは亡き妻エウリュディケを冥界から連れ戻すことに失敗するが、オペラでは婚礼にふさわしく夫婦はそろって生還をはたすハッピーエンドに変更された。これがスコアの残る最初のオペラである。

この時期の代表的な宝物室は、コジモ一世時代がパラッツォ・ヴェツキオ内の「グアルダローバ」「スクリットイオ・デイ・カリオペ」「地図の間」、フランチェスコ一世時代がサン・マルコ修道院隣の「カジノー・デイ・サン・マルコ」とパラッツォ・ヴェツキオ内の「ストゥディオーロ」。そしてフランチェスコ一世の構想を継承してフェルディナンド一世時代に整備されたウフィツィ宮殿内の「トリブーナ」である。このトリブーナが一六世紀から一八世紀まで「驚異の部屋」の中核となる。

この時期のもっとも重要な財産目録は、コジモ一世時代の一五五三年の「グアルダローバ」の財産目録、フェルディナンド一世時代の一五八九年の「トリブーナ」の財産目録である。

一五世紀が古代という時間の発見の世紀だったとするならば、一六世



〔図5〕ドメニコ・ポーロ（？）作インタリオ（コジモ一世の肖像。水晶。一五三七年頃。縦三・四cm。フィレンツェ、銀器博物館。



〔図6〕フランチェスコ・フェッルッチョ・デル・タッカ作カメオ（フェルディナンド一世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌ）。斑岩と蛇紋石。フィレンツェ、バルジェツロ国立博



紀は世界という空間の発見の世紀である。新大陸アメリカの外来物がヨーロッパに流入する大航海時代の幕開けだ。

後期四代トスカーナ大公

大公フェルディナンド一世の没後、トスカーナ大公国の政治と経済は急速な下降線をたどっていく。交易の中心が地中海から大西洋とインド洋に移ったからである。しかし凋落する小国にとっては高い文化力すなわちソフト・パワーこそが大国に伍していくために必要不可欠な外交手段だったので、文化には特別に精力が傾注された。周辺諸国に尊敬されることが生き残りの唯一の方策だったのだ。

この時期、増大するメデイチ・コレクションはウフィツィ宮殿の収納展示と並行し、増築なったピッティ宮殿の秘蔵にしだいに比重が移っていく。宝物の分散化傾向にそって、財産目録も総合的なものから各個人各部屋の小分けになっていく。

第四代トスカーナ大公は、フェルディナンド一世の長男コジモ二世である。その長男の第五代トスカーナ大公フェルディナンド二世の時代は、三十年戦争がヨーロッパを荒廃させ、ペストがトスカーナを襲ったが、暗い世相と反比例するように、大公自身も弟のマッティアスもレオポルド枢機卿もコレクションの増大に血道をあげる。

次の第六代トスカーナ大公コジモ三世^{〔図7〕}は、フランス王ルイ一四世の従妹にしてマリ・ド・メデイシスの孫娘でもあるマルグリット・ルイーザ・ドルレアンを妃に迎えた。この関係はフェルディナンド一世がカトリヌ・ド・メデイシスの孫娘を妃に迎えたのと相似形である。大公コジモ三世と長男の大公子フェルディナンドの時代は、フィレンツェ・バロックが黄金の黄昏のように最後の輝きを放った時代である。

コジモ一世の息子フェルディナンド一世以後、コジモ（二世）、フェルディナンド（二世）、コジモ（三世）と続いた大公には、大公子フェルディナンドが三世となるはずだったが、第七代トスカーナ大公に即位したのは、その弟ジャン・ガストーネである。彼には継嗣がなかったため、一七三七年の死没によってメデイチ家統治時代に幕が降ろされる。

二人の教皇以後、一六世紀から一八世紀までメデイチ家がヨーロッパの国際関係で隠然たる権勢を保ちつづけることができたのは、枢機卿が輩出したからでもある。コジモ一世の一七歳の息子ジョヴァンニは一五六〇年に枢機卿になったが、彼が亡くなった翌年には一四歳の弟フェルディナンドが枢機卿になった。フェルディナンド枢機卿は兄フランチェスコ一世没後、大公位を継承した。コジモ二世の一九歳の弟カルロとコジモ二世の四歳（！）の息子ジャンカルロは同じ一六一五年に枢機卿になったが、ジャンカルロ没後三年目にカルロが跡を追うと、翌年



〔図7〕金製メダル《コジモ三世の肖像》。一六七〇年。直径五・六cm。フィレンツェ、バルジェツェロ国立博物館。

の一六六七年にはジャンカルロの五〇歳(!)の弟レオポルドが枢機卿になった。レオポルド枢機卿が亡くなると、一六八六年、コジモ三世の二六歳の弟フランチェスコ・マリアが枢機卿になったが、コジモ三世に孫ができそうな気配がないために、フランチェスコ・マリアは一七〇八年に四八歳で還俗してグアスタツァ領主の娘エレオノーラ・ゴンザーガと結婚するのが死没の三年前。こうしてみると大公位と枢機卿位を守ろうと必死の努力していることが理解できるだろう。枢機卿位の威光は、あなどりがたい力をいまだ有していたのだ。

ジャン・ガストーネの姉アンナ・マリア・ルイーザ^{〔図8〕}が亡くなり、メデイチ家が断絶するのは一七四三年。死後作成された彼女の財産目録が貴重な史料となる。以上が本書第三部の範囲である。

だがメデイチ・コレクションの運命を理解するために、メデイチ家以後についても触れておかねばならない。

メデイチ家以後

スペイン継承戦争後の国際関係はブルボン家のスペイン王フェリペ五世(ルイ一四世の孫)とハプスブルク家の神聖ローマ皇帝カール六世(マリア・テレジアの父)の覇権争いにあつたが、両者のパワー・ゲームのなかで、メデイチ家のあとにはロートリンゲン家のフランツ・シュテファ

ンが第八代トスカーナ大公(在位…一七三七〜六五年)として即位する。彼はマリア・テレジアと結婚していた関係で、皇帝フランツ一世となる人物であり、フィレンツェではなくウィーンに居を定めた。夫妻は一六八〇の子宝に恵まれたが、末娘がフランス王妃となるマリ・アントワネットであることは、周知のとおりである。

大公フランツ・シュテファンⅡ皇帝フランツ一世が死去すると、長男ヨーゼフ二世が皇帝に、次男ピエトロ・レオポルドが第九代トスカーナ大公(在位…一七六五〜九〇年)に即位する。兄弟ともにフランス啓蒙思想の影響をうけて改革にとりくんだ「啓蒙専制君主」である。

流暢なトスカナ語を話し、トスカナ事情に精通し、フィレンツェに暮らした大公ピエトロ・レオポルドの時代に、ウフィツィ美術館の一般公開(一七六九年)からヨーロッパ最初の死刑と拷問の廃止(一七八六年)まで「レオポルド改革」と総称される一連の啓蒙主義的諸改革が断行された。さらに一七七〇年四月二日には一四歳のモーツァルトがボッジョ・インペリアーレの別荘に招かれて御前演奏をしている。

兄ヨーゼフ二世の没後、ピエトロ・レオポルドはウィーンへ去り皇帝レオポルト二世として即位する。プラハにおける彼のベーメン王戴冠式に際し、一七九一年九月六日に初演されたのが、モーツァルトの作曲と指揮による祝典オペラ『皇帝ティートの慈悲』である。これは三五歳の



〔図8〕ドイツ製カメオ《アンナ・マリア・ルイーザの肖像》
《フアルツ選帝侯ヨハン・ヴィルヘルムの肖像》。赤縞
瑪瑙、縞瑪瑙、鍍金ブロンズ。一七世紀末から一八世紀
初頭。縦七・六cm。フィレンツェ、銀器博物館。

メディチ家略年表

1397	ジョヴァンニ・ディ・ピッチ、フィレンツェにメディチ銀行創設
1434	コジモ・イル・ヴェッキオ、市政掌握
1436	サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂献堂式
1444	コジモ・イル・ヴェッキオ、ラルガ通りのメディチ邸着工
1464	ピエロ・イル・ゴットーゾ、フランス王ルイ 11 世より百合の紋章の使用許可
1471	ロレンツォ・イル・マニフィコ、教皇シクストゥス 4 世の即位式に出席
1492	ロレンツォ・イル・マニフィコ死去。コロンブス西航
1494	フランス王シャルル 8 世、イタリア侵攻。イタリア戦争開始（～ 1559）。 メディチ家追放。サヴォナローラの神権政治（～ 1498）
1512	メディチ家復帰
1513	教皇レオ 10 世即位（～ 1521）
1523	教皇クレメンス 7 世即位（～ 1534）
1527	皇帝軍によるローマ劫略。メディチ家追放
1529	メディチ＝皇帝軍によるフィレンツェ包囲戦（～ 1530）
1531	初代フィレンツェ公アレッサンドロ、フィレンツェ復帰
1533	カトリクス・ド・メディシス、のちのフランス王アンリ 2 世と結婚
1537	アレッサンドロ公暗殺。コジモ 1 世、第 2 代フィレンツェ公になる
1540	コジモ 1 世、メディチ邸からパラッツォ・ヴェッキオに居を移す
1549	コジモ 1 世妃エレオノーラ、ピッティ邸を購入
1559	カトー・カンブレジの和によりイタリア戦争終結
1565	フランチェスコ 1 世、ジョヴァンナ・ダウストリアと結婚
1568	ヴァザーリ、『美術家列伝』第 2 版刊行
1569	コジモ 1 世、教皇ピウス 5 世よりトスカーナ大公位を授与される
1585	天正遣欧使節、フランチェスコ 1 世とビアンカ・カペッロに謁見
1588	フェルディナンド 1 世、ウフィツィ宮殿内に大公直轄工房を組織
1589	フェルディナンド 1 世、クリスティーヌ・ド・ロレーヌと結婚
1600	マリ・ド・メディシス、フランス王アンリ 4 世と結婚
1604	フェルディナンド 1 世、プリンチピ礼拝堂の建設を開始
1610	ガリレオ・ガリレイ、『星界の報告』と望遠鏡をコジモ 2 世に献呈
1616	慶長遣欧使節、コジモ 2 世とマリア・マッダレーナ・ダウストリアに謁見
1632	マッティアス、三十年戦争に参戦
1633	ガリレオ・ガリレイ、ローマの裁判で有罪判決
1637	フェディナンド 2 世、ヴィットリア・デッラ・ローヴェレと結婚
1659	フェディナンド 2 世、メディチ邸をリッカルディ家に売却
1661	コジモ 3 世、マルグリット・ルイーゼ・ドルレアンと結婚
1737	ジャン・ガストーネ死去。アンナ・マリア・ルイーザ、新大公フランツ・シュ テファンと「家族協定」を結ぶ
1743	アンナ・マリア・ルイーザ死去

モーツァルトが『魔笛』や『レクイエム』を作曲した生涯最後の年のことだった。

ピエトロ・レオポルドの次男フェルディナンド三世が第一〇代トスカーナ大公（在位…一七九〇～九九年、一八一四～二四年）に即位するが、マリ・アントワネットの甥である関係からフランス革命に巻き込まれる。一七九九年にフランス軍がフィレンツェに侵攻すると、国外脱出を余儀なくされ、帰還はナポレオンの没落をまたねばならなかった。

二七歳の若いレオポルド二世が第一一代トスカーナ大公（在位…一八二四～五九年）に即位するが、今度は約三〇〇年つづいたトスカーナ大公国じたいが住民投票によりサルデーニャ王国に併合され、統一イタリア王国が誕生する（一八六一年）。

ロンドンの大英博物館の開館は一七五九年、パリのルーヴル美術館の開館は一七九三年。一八世紀後半は合理精神につらぬかれた啓蒙主義の影響下で知の体系化がすすみ、さまざまな博物館や美術館が整備されていく時代であるとともに、博物学でいえば、デュフォン伯の浩瀚な『博物誌』（二七四九～七八年）から幻想動物が姿を消した時代でもある。

したがって最後のメディチ家統治時代は啓蒙主義以前という括りになる。

フランチェスコ一世とフェルディナンド一世の鸚鵡貝製品

フランチェスコ二世の《双鸚鵡貝製把手付き水差し（メッシーローバ）》

フランチェスコ一世は自然の驚異と人工の驚異の結合を好んだが、彼のコレクションにあった最高傑作のひとつは、鸚鵡貝を二つ組み合わせた《双鸚鵡貝製把手付き水差し（メッシーローバ）》（銀器博物館）図98である。

鸚鵡貝は南太平洋に棲息する軟体動物で、貝殻が鸚鵡の嘴の形に似ていることからその名がつけられた。「生きた化石」と呼ばれる珍しい東方の生物である。これにフランドル人工房の熟練職人の手になると推測される、趣向を凝らしたドラゴン形の注ぎ口や蛇形の把手が加えられ、ルビーとトルコ石がちりばめられている。注ぎ口のドラゴンの形は明らかに中国の龍からヒントを得ているが、脚部はニュルンベルク工房の作風であり、全体の装飾は折衷的といえるほどに各地の要素が複雑に混雑している。



〔図98〕筆者撮影：中段右から二番目…フランドル人工房《双鸚鵡貝製把手付き水差し（メッシーローバ）》。鸚鵡貝・金メッキ装飾・ルビー、トルコ石。一六世紀後半。高さ三〇cm。上段左端…中国の工房とフイレンツェの工房（？）《酒杯》。犀角・銀。一六世紀。高さ二一・五cm。フイレンツェ、銀器博物館。



「図99」中国の工房とフランスの工房（双鸚鵡貝製の容器）。鸚鵡貝、金メッキ装飾。一六世紀後半。フィレンツェ、銀器博

中国の鸚鵡貝製品

鸚鵡貝は一六世紀前半から数多く中国（明朝）の広東（広州）からやって来たが、中国産と断定できるのは、『双鸚鵡貝製の容器』（銀器博物館）のように、鸚鵡貝自体に中国人や植物の模様がほどこされているからである。この作品は、一六一八年にカジーノ・ディ・サン・マルコからパラッツォ・ヴェッキオの「グアルダローバ」に移されたが、一六世紀のコレクションだったものである。金属装飾も風変わりで、製作場所はフランドル説のほかにドイツ説や中国説まであり、一七世紀に改作された可能性も否定できない。

《鸚鵡貝製のソース容れ》（銀器博物館）^{「図100」}の二点は、パリの職人フランソワ・クルヴクールが一五五五年から六七七年のあいだに金属装飾をほどこしたもので、三頭の細いイルカが支える脚部が同形である。右の作品には大胆にそりかえる龍の図、左の作品には中国人と建物のカラフルな彩色がほどこされている。中国のおそらくは広東の工房で製作されたものである。ともに一六一八年にカジーノ・ディ・サン・マルコからパラッツォ・ヴェッキオの「グアルダローバ」に移された記録があるが、クリステイーン・ド・ロレーヌがフランスから持参した可能性が高い。壊れやすい鸚鵡貝が中国からの長旅をよく耐えたものである。

「図100」筆者撮影：右…中国の工房とフランスの工房（パリのフランソワ・クルヴクール）（鸚鵡貝製のソース容れ）。鸚鵡貝、金属装飾。一五五五～六七七年。高さ一七・五cm。フィレンツェ、銀器博物館。
左…中国の工房とフランスの工房（パリのフランソワ・クルヴクール）（鸚鵡貝製のソース容れ）。鸚鵡貝、金属装飾。一五五五～六七七年。高さ一七・五cm。フィレンツェ、銀



「鸚鵡貝製品の変り種」

《鸚鵡貝製の容器》（銀器博物館）^{〔図101〕}は、鸚鵡貝自体に手が加えられていない代わりに、金属装飾が例外的に手の込んだ精妙さである。鸚鵡貝の口縁には二頭のヒッポカンポス（半馬半魚の海馬）、頂にはカタツムリにまたがる小人がちょこんと座っている。鸚鵡貝を支える台座の脚部がこれまた奇妙で、ターバンとスカートを身につけたエキゾチックな人物が右手にもつ鎖につないだライオンの尻尾が蛇の形ときている。

鸚鵡貝製品の変種として、《巨大カタツムリ形容器（ヴェルサトイオ）》（銀器博物館）^{〔図101〕}を最後にあげておきたい。これは鸚鵡貝の貝殻をカタツムリの殻に見立て、銀製の胴体に組み合わせたもので、長さが三二・八センチもある。実際のカタツムリの殻ではこれだけの迫力を出せないのが、置物として十分に見応えがある。なんの意味もないが、目を楽しませるファンシーな優品である。



〔図101〕筆者撮影：下段右端・ドイツの工房《鸚鵡貝製の容器》。鸚鵡貝、銀、鍍金ブロンズ。一六〇〇年頃。高さ三三・五cm。下段左端・フィレンツェの工房《巨大カタツムリ形容器（ヴェルサトイオ）》。銀彫刻と鸚鵡貝。一六〇八年頃。高さ一〇cm。長さ三二・八cm。フィレンツェ、銀器博物館。

19

貴石象嵌細工「フィレンツェ・モザイク」

「驚異の部屋」の超絶技巧

貴石製の象嵌細工というのは、イタリア語で「コンメツソ」、英語で「モザイク」というが、「モザイク」という言葉から連想される粗雑さとは似ても似つかない高度に洗練された工芸品である。カラフルな貴石を細かくカットし、数百もの石片をジグソーパズルのように隙間なくびつしりと組み合わせて「石の絵」（フェルディナンド一世の言葉）を描く超絶技巧は、まさに驚異の神業というほかはない精密さである。

大公直轄工房で生産される「フィレンツェ・モザイク」は、各国の「驚異の部屋」にとって必須アイテムだった。現在ではフィレンツェの博物館のほか、ルーヴル美術館、ヴィクトリア&アルバート美術館、ドレスデン美術館、エルミタージュ美術館などにも所蔵され、二〇〇六年にフィレンツェのピッティ宮殿、二〇〇八年にニューヨークのメトロポリタン美術館で大規模な展覧会が開催されたことからわかるように、近年にわかに脚光を浴びて再評価がはじまった工芸分野である。



〔図102〕筆者撮影：ローマの工房《楕円形テーブル》。天板は白大理石、スペイン産色紋入り大理石、貝殻入り大理石、雪花石膏、ラピスラズリ、紅玉髓、碧玉など。脚部は胡桃材に金。一五七五〜八〇年。高さ七〇cm。フィレンツェ、銀器博物館。

ローマ風の幾何学文様

プリニウスの『博物誌』に記述のある「オプス・セクティレ」技法を用いた貴石象嵌細工は、一六世紀半ばからローマで人気に火がつき、貴族の蒐集家のあいだで貴石製容器の蒐集熱をしのぐほどになった。枢機卿としてローマで成長したフェルディナンド一世は、先進文化を吸収してフィレンツェに移植するのに一役かった立役者である。たとえば枢機卿時代のフェルディナンドがローマで所有していた『楕円形テーブル』（銀器博物館^{図102}）は、貴石象嵌細工の天板に使用された天文学的占星術的なデザインが特徴的で、周囲には当時流行していた黄道十二宮の一二記号が並んでいる。マクロコスモスとミクロコスモスの一致の発想から、表のとおり黄道十二宮と星座と人体には照応関係があると信じられた。

フィレンツェが貴石象嵌細工の一大中心地に発展するのは、枢機卿フェルディナンドが大公に即位した年すなわち一五八八年の九月三日の法令によって、ウフィツィ宮殿内に大公直轄工房（イタリア語の正式名称は「ガッレリア・デイ・ラヴオーリ」）を組織し、国家事業としての生産を本格化させたときからである。しかし、すでにコジモ一世時代やフランチェスコ一世時代にも製作ははじまっており、フランチェスコ一世は一五八六年に工房をカジノー・デイ・サン・マルコからウフィツィ宮殿

内に移していた。初期のデザインの特徴は、ローマの影響を受けた幾何学文様である。

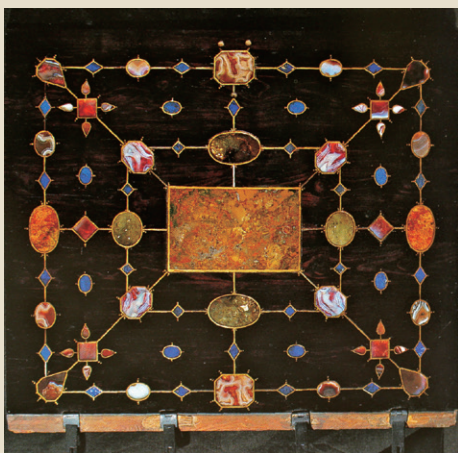
フランチェスコ一世のためにつくられた『フランチェスコ一世のキャビネットのための跳ね蓋』（銀器博物館^{図103}）は、ウフィツィ宮殿のトリブーナの中央に置かれていたキャビネット「ストゥディオーロ」の断片（八点の跳ね蓋の一点）であり、四つの蝶番で開閉できる蓋の部分である。黒檀の背景にカラフルな貴石を幾何学的に配置し金色の銅線で結びつけるという、現代美術を想わせる、とびきりエレガントな作品である。このキャビネットはブオンタレンティのデザインに基づき、ドイツ人家具職人バルトロメオ・デルマン（ヘルマンの息子バルトロメウス）を中心に各種の専門職人が共同で製作したものである。このキャビネットはフェルディナンド一世の新しいキャビネット「ストゥディオーロ・グランデ」に取り替えられたあとに解体されて、このしやれた跳ね蓋一点だけが残った。

フランチェスコ一世は貴石の蒐集に熱中するあまり、ルッカ北方のバルガに碧玉の採石場を開設したほどである。バルガ産の「バルガ」は赤褐色と白のまだら模様がとりわけ美しい。大公お抱えのバルガ出身の薬草学者フランチェスコ・マツツェランギは鉱物の情報を頻繁に大公に伝えている。薬草学者が鉱物学者を兼ねることが多いのは、当時の医療で

黄道十二宮と星座と人体の照応関係

黄道十二宮		星座	人体
白羊宮（はくようきゆう）	金牛宮（きんぎゆうきゆう）	牡羊座	頭
双児宮（そうじきゆう）	巨蟹宮（きょかいきゆう）	双子座	両腕
獅子宮（ししきゆう）	処女宮（しよじきゆう）	蟹座	胸
処女宮（しよじきゆう）	天秤宮（てんびんきゆう）	獅子座	心臟
天秤宮（てんびんきゆう）	天羯宮（てんかつきゆう）	乙女座	腸
天羯宮（てんかつきゆう）	人馬宮（じんばきゆう）	天秤座	腎臓
人馬宮（じんばきゆう）	磨羯宮（まかつきゆう）	蠍座	性器
磨羯宮（まかつきゆう）	宝瓶宮（ほうへいきゆう）	射手座	尻
宝瓶宮（ほうへいきゆう）	双鱼宮（そうぎきゆう）	山羊座	膝
双鱼宮（そうぎきゆう）		水瓶座	踵
		魚座	足

【図103】フィレンツェの工房（バルトロメオ・デルマン）（フランチェスコ二世のキャビネットのための跳ね蓋）。黒檀、貴石、金メッキした銅線。一五八〇年代。五六・七×六四・三cm。フィレンツェ、銀器博物館。



は薬草とともに呪術的治癒力のある鉱物が薬の粉末として使用されていたからである。

フェルディナンド一世のためにつくられた《貴石を象嵌した木製テーブル》(鉱物学・岩石学博物館)も、よく似た幾何学文様である。もともとトリブーナの新しいキャビネット「ストウディオ・グランデ」(消失)を構成する正面の一部だったもので、現存する唯一の木製部分である。かつて、このキャビネットの表面を飾っていたのは、金、銀、真珠、瑪瑙、ラピスラズリ、碧玉、紅玉髓、水晶、トパーズ、柘榴石、トルコ石、ルビー、エメラルド、藍玉、紫水晶、サファイア、ダイヤモンドなどの宝石類である。宝物を収納する家具自体がこのうえなく豪華な宝物だったのだ。キャビネットの製作は木工師ドメニコ・デル・タッソがはじめ、「黒檀の匠」クリストフ・パウルが完成したが、一五九三年から一五九九年まで六年の歳月を要した。これがメディチ家断絶後の一七八〇年に撤去されるまでトリブーナにあったキャビネットである。

《幾何学装飾のあるテーブル天板》(銀器博物館) 〔図104〕は、白大理石にいろいろな貴石(中心の八角形はアメジスト)が幾何学的に配置されている。遠近法を使ったシンメトリカルな構図に万華鏡をのぞくようなおもしろさがある。フランチェスコ一世時代の作品と考えられてきたが、フェルディナンド一世時代の作品とする新説も出ている。

「抽象」から「具象」へ

確実なことは、フェルディナンド一世時代に装飾デザインが「抽象」から「具象」へとしだいに変化していったことである。この変化はちょうど一五八八年の大公直轄工房の創設時期と符合しており、石と石の継ぎ目のない信じられないほど精緻な、あたかも一枚の「石の絵」のような錯覚を与えることを可能にした高度な技術の達成が背景にある。

移行期の折衷形態には、かつてペトリアアのメディチ家別荘にあった《鸚鵡と花瓶と戦利品のあるテーブル天板》(貴石細工研究所博物館) 〔図105〕やポッジョ・インペリアーレのメディチ家別荘にあった《正方形テーブル天板》(銀器博物館) 〔図106〕がある。前者にはフランドル産碧玉を背景にローマの古代遺跡から切り出した色大理石が使用されている。後者には中央の八角形に稀少な古代石材のアンティオキア産「オッキアート」(目玉模様石)が使用され、そこから放射状にローマ風の幾何学文様がひろがり、隙間に花柄が点々と配されている。前者の黒い背景と後者の花柄が結合したデザインが、一七世紀にヨーロッパで大流行する「フィレンツェ・モザイク」あるいは「フィレンツェ風モザイク」の基本要素となるものである。同好の皇帝ルドルフ二世なども、フィレンツェの職人コジモ・カストルッチを引き抜いて首都プラハの宮廷へ招聘したほどである。



〔図104〕筆者撮影：フィレンツェの工房《幾何学装飾のあるテーブル天板》。白大理石、貴石(アメジスト、碧玉、瑪瑙、ラピスラズリ)。二五六〇～八〇年。天板は三三×三三cm。フィレンツェ、銀器博物館。



〔図105〕筆者撮影：大公直轄工房《鸚鵡と花瓶と戦利品のあるテーブル天板》。一六世紀末。フィレンツェ、貴石細工研究所博物館。



〔図106〕大公直轄工房《正方形テーブル天板》。一六世紀末から一七世紀初頭。二二×二二cm。フィレンツェ、銀器博物館。

紋章と肖像

大公直轄工房の最初の数十年間のうちに、大公冠とメデイチ家の紋章のあるシリーズ、たとえば《メデイチ家の紋章のある長方形テーブル》（銀器博物館）やフェルディナンド一世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌの結婚に際して製作された《メデイチ・ロレーヌ家の紋章》（貴石細工研究所博物館）^{〔図107〕}、さらに人物画のなかでも最高難度の肖像画のシリーズがつくられるようになる。

最初のモザイク肖像画は《コジモ一世の肖像》（貴石細工研究所博物館）である。一五九八年にフランチェスコ・フェッルツチが、本来サン・ロレンツォ聖堂プリンチピ礼拝堂のコジモ一世墓碑のために製作したもので、大公を称揚する意図からトスカーナ産の貴石だけが使用された。これは、前年に画家ドメニコ・クレステイ通称イル・パツシニャーノが描いた油彩画《コジモ一世の肖像》（貴石細工研究所博物館）に基づいており、現在は二点とも同室に並んで展示されている^{〔図108〕}。

フランチェスコ・フェッルツチは、一六〇〇年にマリ・ド・メデイシスが結婚に際して持参した《フランス王アンリ四世の肖像》（消失）、一六〇一年に《フェルディナンド一世の肖像》（消失）や《教皇クレメンス八世の肖像》（ロサンジェルス、ジャン・ポール・ゲティ美術館）^{〔図109〕}もつくつ

ている。この最後の作品は、フェルディナンド一世が教皇クレメンス八世（在位：一五九二～一六〇五年）に贈ったもので、フランドル産の漆黒の碧玉を背景に、玉髄と真珠層でできた教皇の胸像が氷のように冷たい豪華な輝きを放っている。

サン・ロレンツォ聖堂プリンチピ礼拝堂

ヴァザーリが「貴石はどんな細工も可能な素材であり、そのなかに過去と記憶をよく保存することができる」と述べているように、フェルディナンド一世が「メデイチ王朝」の栄光を未来永劫に伝える霊廟を建造するにあたって、死の忘却を拒む不朽の煌めく貴石を採用したのは必然の帰結だった。それがサン・ロレンツォ聖堂プリンチピ礼拝堂^{〔図110〕}である。これは一六〇二年のコンクールで優勝したフェルディナンド一世の異母弟ジョヴァンニ・デ・メデイチ（生母はエレオノーラ・デリ・アルビッツィ）の設計により一六〇四年に着工された八角形の霊廟で、マッテオ・ニジエツティが建築監督を担当した。八角形は洗礼堂から大聖堂交差部、トリブーナと数世紀うけつがれてきた聖なる形である。ここには歴代大公が埋葬されることになるが、大公直轄工房が総力をあげてとりくんでも、内装の完成は一九世紀中葉までかかった。驚くべきは、一六〇四年の着工以前から、すでにトスカーナ諸都市の《都市の紋章》（サン・ロレ

〔図107〕筆者撮影：左上…大公直轄工房《メデイチ・ロレーヌ家の紋章》。一五九〇年頃。縦三九cm。フィレンツェ、貴石細工研究所博物館。



〔図108〕筆者撮影：左…フランチェスコ・フェッルツチ《コジモ二世の肖像》。トスカーナ産各種貴石。一五九八年。右下…ドメニコ・クレステイ《コジモ一世の肖像》。油彩。一五九七年。フィレンツェ、貴石細工研究所博物館。



〔図109〕大公直轄工房（フランチェスコ・フェッルツチ）《教皇クレメンス八世の肖像》。一六〇一年。ロサンジェルス、ジャン・ポール・ゲティ美術館。



〔図110〕筆者撮影：ジョヴァンニ・デ・メデイチ設計、プリンチピ礼拝堂。一六〇四年着工。フィレンツェ、サン・ロレンツォ聖堂。



ンツォ聖堂（プリンチピ礼拝堂）やキボリウムなど貴石象嵌の製作がはじまっていたことで、造営にかかる大公の並々ならぬ情熱を示している。《トスカーナの田園風景》（貴石細工研究所博物館）なども、本来はプリンチピ礼拝堂の祭壇用につくられた作品である。

石材も近くはヴォルテッラ産の碧玉や雪花石膏、遠くはアフガニスタンのラピスラズリやインドのゴア産の瑪瑙など数百種がフィレンツェに集められた。石の蒐集には、商人、大使、学者、職人、友人、知人のネットワークが活用された。

大公直轄工房の具象画傑作群

職人もミラノから家族ごと招聘したカロニ家（一五七二年）とガッフリー家（一五七五年）を中心に彫石から象嵌まで腕を競い合つて、大勢が大公直轄工房で働いた。彫石と象嵌の両方の技術が融合した作例が、《キリストとサマリアの女の壁龕》（ウィーン、美術史美術館）である。ジャック・ビリフェルトが金細工とエナメル細工を担当し、ジョヴァンニ・アンブロジーヨ・カロニが水晶製の壁龕を担当し、クリストーフ・アノ・ガッフリーが貴石製の二人の多色人物像を担当し、ベルナルディーノ・ガッフリーが背景の風景を担当して福音書の出会いの場面に騎士物語風の雰囲気を加味している。

同時期（二六世紀末）の傑作が《シニョリア広場の景観》（銀器博物館）である。楕円形の空間に劇場の書き割りを思わせる極端な遠近法を用いて魅力的な広場が再現されている。ジャック・ビリフェルトが水晶を素地として銀色に輝く建物（パラッツォ・ヴェッキオ、ロτζジャ・デイ・ランツイ、ウフィツィ宮殿）と金箔をほどこした彫像（コジモ一世騎馬像、ダヴィデ像、ペルセウス像など）を担当し、ベルナルディーノ・ガッフリーが碧玉製の舗石とラピスラズリ製の青空を担当した。ラピスラズリに含まれる白色の方解石や長石のまだら模様がちょうど雲のように見えておもしろい。この作品はトリブナーのキャビネット「ストゥディオ・ロー・グラnde」を飾るためにつくられたものである。

具象画の頂点をなすサン・ロレンツォ聖堂主祭壇の《マナの恵み》^{〔図11〕}は、ほとんど油彩画と見分けがつかないほど精巧である。マナというのは『旧約聖書』の「出エジプト記」に登場する神が降させた不思議な食物のことで、それをイスラエルの民が容器に集めている場面である。下絵はベルナルディーノ・ポツチェッティ。象嵌職人は、プリンチピ礼拝堂の仕事をしていたクリストーフ・アノ・ガッフリーの甥ジョヴァン・バッティスタ・サッシである。



〔図11〕筆者撮影：ジョヴァン・バッティスタ・サッシ（ベルナルディーノ・ポツチェッティの下絵に基づく）《マナの恵み》。一六二〇年。フィレンツェ、サン・ロレンツォ聖堂。



〔図12〕筆者撮影：ジャック・ビリフェルト、ベルナルディーノ・ガッフリー《シニョリア広場の景観》。金、各種貴石。一五九九〜一六〇〇年。横二五・五cm。フィ

下絵画家ヤコポ・リゴッツィ

貴石象嵌細工の下絵画家としてもっとも重要な人物は、ヴェローナ生まれの画家ヤコポ・リゴッツィである。ボローニャ大学の博物学者ウリッセ・アルドロヴァンデイ（一五二二〜一六〇五年）の一五七七年九月九日の記述に、フィレンツェ宮廷に動植物の細密画を描く「すぐれた画家」がいることから、この人物がリゴッツィと考えられる。フランチェスコ一世以下四人の大公に仕えた万能の画家だったが、自然観察に没頭するときだけ安らぎを覚えるような、几帳面で気難しい性格だった。

リゴッツィの下絵に基づく作品に《リヴォルノ港の景観のあるテーブル》（ウフィツィ美術館^{〔図13〕}）がある。クリストフ・ファン・ガッフリーが三年の歳月をかけて一六〇四年に完成した。フェルディナンド一世は一五九三年に「リヴォルノ憲章」を發布してリヴォルノを「自由港」とし、ユダヤ人やムスリム商人を呼び込むことに成功した。フェルディナンド一世はこの作品の注文で自身の偉業を永遠化したのだ。

リゴッツィの下絵に基づく大作《花瓶と花々のあるテーブル》（パラティーナ美術館^{〔図14〕}）は、玉虫色に輝く驚異的な作品である。本来はプリンチピ礼拝堂主祭壇の前部装飾のために七年の歳月をかけて製作されたが、のちにテーブル天板に変更された。エキゾチックな鳥や昆虫や植物



〔図13〕 大公直轄工房（ヤコポ・リゴッツィの下絵に基づきクリストフ・ファン・ガッフリーが製作）《リヴォルノ港の景観のあるテーブル》。一六〇一〜〇四年。九四×二〇七cm。フィレンツェ、ウフィツィ美術館。



〔図14〕 大公直轄工房（ヤコポ・リゴッツィとベルナルディーノ・ボツチエッティの下絵に基づきジョヴァン・バッティスタ・サッシとヤーコプ・フォン・フラッハが製作）《花瓶と花々のあるテーブル》。一六〇三〜〇四年。九五×二八四cm。フィレンツェ、パラティーナ美術館。左ページ

が稠密に描き込まれ、それらが銀色の玉髄を背景に、まるで地上の楽園の幻視のように明滅して目眩をさそう、不可思議な色と形の饗宴である。リゴッツィの下絵に基づく、碧玉とラピスラズリ製の市松模様が鮮やかに《チェスボード》^[図15]（銀器博物館）の周囲には、とりどりの花と蝶が配され愛らしい作品に仕上がっている。蝶の羽や花びらや葉のグラデーシオンからは、自然を慈しむ画家のやさしさが伝わってくる。

やはりリゴッツィの下絵に基づく最高傑作の一点が、製作に七年も要した《花のテーブル》^[図16]（ウフィツィ美術館）である。一一二センチ×一六二センチの碧玉製の黒いテーブル全面に無数の花々がまき散らされた驚くべき作品である。同時代の史料にも「花散らし」という適切な言葉で特徴が明示されている。リゴッツィ自身が特別な思い入れを込めて貴石の濃淡を選定したため、花々の形状と色調とが完璧に調和している。中央には月桂冠、四隅には四色のアザミが配されて緊張感のある空間秩序を保っているが、さらに目を凝らすと蝶の幼虫と成虫も確認できる^[図17]。まさに、神は細部に宿り給うのだ。

フィレンツェからヨーロッパ諸宮廷に贈られたのは、リゴッツィ風の「自然主義」のテーブルであり、黒い背景に花や果実や鳥や昆虫が配された主題が「フィレンツェ・モザイク」の典型としてもてはやされた。そうした一例はフィレンツェからデンマークに贈られた《花と果実のあ



【図15】大公直轄工房（ヤコポ・リゴッツィの下絵に基づき）ジョヴァン・パッテイスタ・サッシが製作（「チェスボード」）。一六二七〜二九年。五七×五四cm。フィレンツェ、銀



【図16】大公直轄工房（ヤコポ・リゴッツィの下絵に基づき）ヤコポ・モンニカが製作（「花のテーブル」）。一六二四〜二二年。一一二×一六二cm。フィレンツェ、ウフィツィ美術



【図17】「花のテーブル」部分。

るテーブル》(コペンハーゲン、ローゼンボー城)にもみられる。

風景石に描かれた絵

以上は貴石象嵌細工という「石で描かれた絵」であるが、「石に描かれた絵」があることも付言しておきたい。サン・マルコの修道士アゴステイーノ・デル・リツチョ(一五四一〜九八年)が一五九七年に執筆した『石の歴史』のなかで「雅で愛らしい石の崇拜者たちが、アルノ川のなかを探しはじめた」と述べているように、アルノ川の底には「アルベレーゼ」という特殊な石灰石があり、模様が峨々たる岩山の風景のように見えるので「風景石」と呼ばれた。神の筆になる天然石の奇抜な模様だけでも珍重されるが、画家が筆を加えるのが時代の趣味だった。

ヤコポ・リゴッツィの息子フランチェスコ・リゴッツィ(一五九〇?〜一六四一年)が風景石に油彩で描いたのは、『地獄のダンテとウエルギリウス』(貴石細工研究所博物館)^[図118]である。父のヤコポが『神曲』の挿絵を描いているので、息子のフランチェスコにとっても馴染深いテーマであり、左下のダンテとウエルギリウスの人物造形には父の作品からの引用が認められる。一方、本作の右側には、風景石のこの世ならぬ荒涼とした模様を背景に、地獄で拷問に苦しむ罪人たちが小さく描き込まれている。



[図118] 筆者撮影：フランチェスコ・リゴッツィ《地獄のダンテとウエルギリウス》。風景石に油彩。一六二〇年。三三×三三cm。フィレンツェ、貴石細工研究所博物館。